

## 公益財団法人 東南アジア文化友好協会設立 60周年を迎えるにあたり

理事 渡部 信

今、私たちの財団は2023年に60周年を迎えようとしています。常日頃、当財団を覚え、長きにわたる支援を頂いておりますことを心から感謝いたします。

この財団の働きは、1949年に大東亜戦争による「東南アジア諸国への被災者に対する償いの働き」を訴えた加藤亮一牧師によって、発起人、石井光次郎、片山哲、尾崎道雄、北村徳太郎、都田恒太郎、各氏の協力を得て、1963年にこの財団法人が設立されました。加藤亮一牧師は、戦中、日本基督教団よりインドネシア宣教師として従事しましたが、戦後、いち早く、東南アジア諸国への「償いの働き」として救済活動を実行されたのです。戦争の謝罪を口に出すことも大切ですが、実際に償いの行動を起こすことはもっと素晴らしいことではないでしょうか。

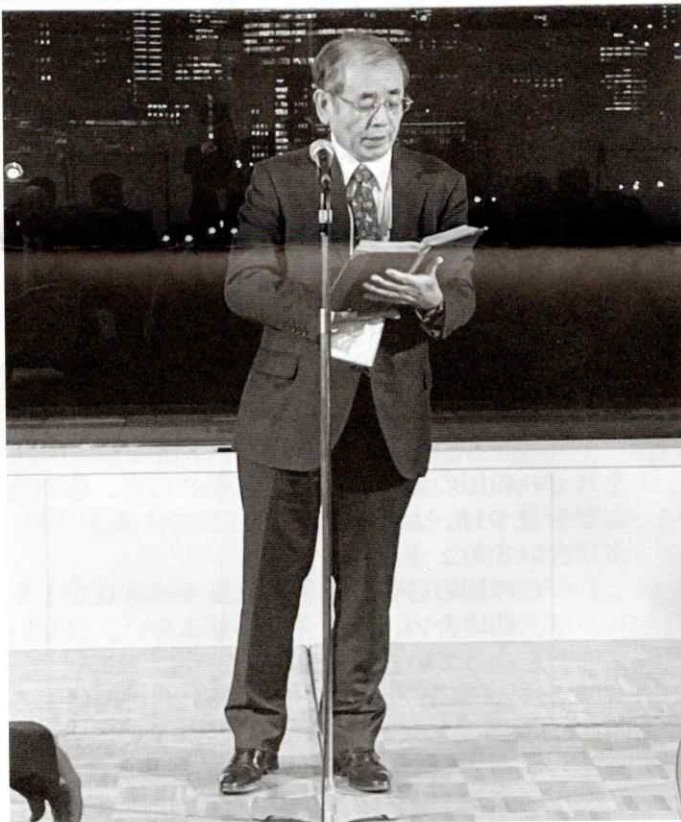
特に加藤亮一牧師は、戦争の償いの具体化として「戦争孤児」を日本に留学させる構想を掲げました。1960

年からインドネシア賠償留学生の最初の世話を始め、1964年には外務省から委嘱された形で、ベトナムの救援活動にも協力し、医師団の派遣、医薬品、救援物資を送ったそうです。また1965年には東南アジア学生寮を完成し、フィリピン、シンガポール、マレーシア、タイ、香港から最初の20名の寮生を迎え、それ以来、韓国、中国、ベトナム、ラオス、カンボジアと範囲を広げ、この間、合計約800名を数える留学生を受け入れることができました。

私は、以前、財団法人 日本聖書協会の総主事として聖書普及事業に従事してきましたが、アジアで他国の聖書協会を金銭的に援助できる国は、僅か日本と韓国だけでした。今は、シンガポール、中国が経済力を得てきましたが、未だ貧しいのがアジア諸国です。これらの国にとって留学は金銭的に難しく、日本への留学生の受け入れは、彼らにとってまたとない青春の希望だったでしょう。そして卒業して帰国後には、その学んだ技術、知識を生かして皆、活躍されている知らせを聞くことは、喜びでもあり、感謝なことです。

さて翌年には財団設立60周年を迎えようとしています。戦後の償いの働きも、このように具体的に留学生寮を提供することによって始められましたが、近年、戦争を知らない世代が、日本へ技能実習生として来日し、移住やビザ問題で、不法滞在されている外国の方々がたくさんおられます。旧約聖書には「あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である」(レビ記19章34節)と書かれています。私自身も4年間の留学経験があります。学生ビザでしたが、不便なこともいろいろ経験し、助けられました。

戦後に始められた償いの働きは、アジアの隣人への愛の働きとして更なる展開へと期待されております。皆さま方からの知恵とご助言を賜り、将来に向かってのご意見、ご支援を頂ければと心からお願いする次第です、皆さまの上に神様の祝福をお祈りします。



アジアの集いで聖書を読む渡部先生